昔のおもかげ探す瀬台野散策

2010.7.25

北上夜曲の碑

小谷木橋附近の風光明媚な風景に感銘を受け、菊地規が詞を作ったのは昭和15年、翌年その詞に曲をつけたのが友人の安藤睦夫で、その当時二人はまだ十代でした。この歌は全国的にヒットし、今も人々に歌い継がれる日本の名曲のひとつになりました。

「北上夜曲」

菊地　規：作詞
安藤　睦夫：作曲

(1)
匂い優(やさ)しい　白百合の
濡れているような　あの瞳
想い出すのは　想い出すのは
北上河原の　月の夜

(2)
宵の灯（ともしび）点（とも）すころ
心ほのかな　初恋を
想い出すのは　想い出すのは
北上河原の　せせらぎよ

(3)
銀河の流れ　仰ぎつつ
星を数えた　君と僕
想い出すのは　想い出すのは
北上河原の　星の夜

(4)
春のそよ風　吹く頃に
楽しい夜の　接吻(くちづけ)を
想い出すのは　思い出すのは
北上河原の　愛の歌

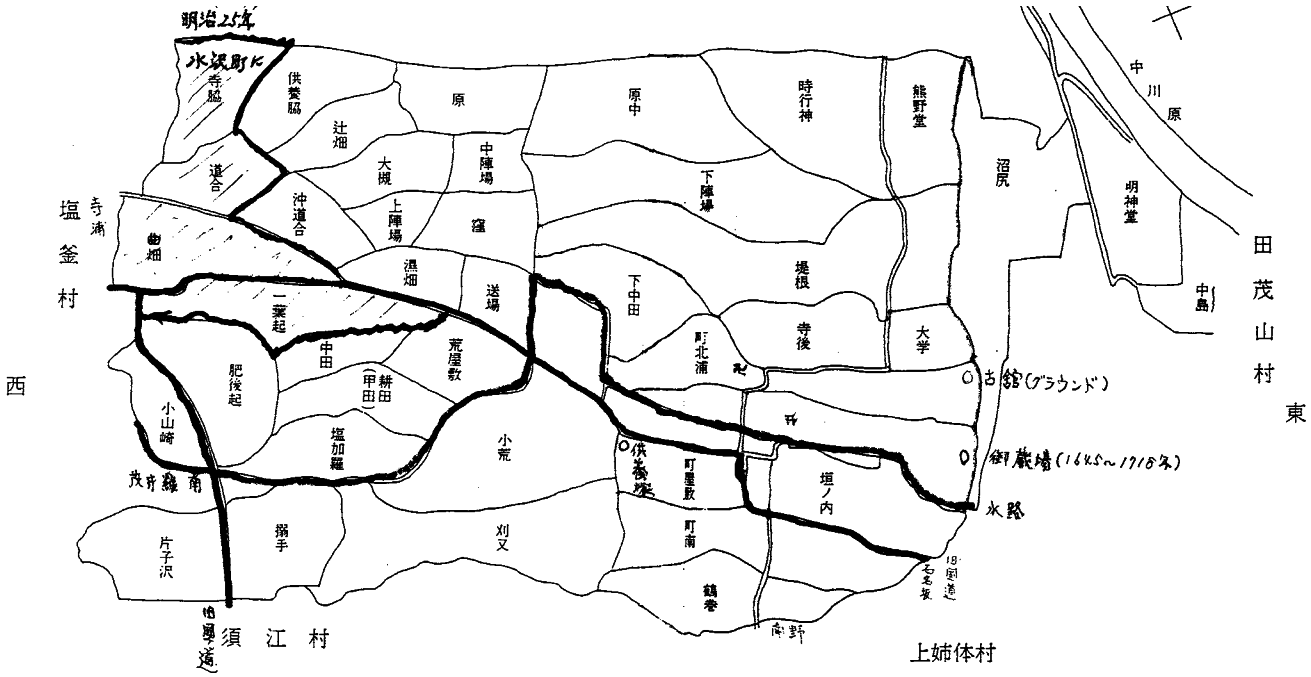
(5)
雪のチラチラ　降る宵(よい)に
君は楽しい　天国へ
想い出すのは　思い出すのは
北上河原の　雪の夜

(6)
僕は生きるぞ　生きるんだ
君の面影（おもかげ）　胸に秘め
想い出すのは　想い出すのは
北上河原の　初恋よ

瀬台野の成り立ちと歴史

原始・古代	→	数々の遺跡から人々が小さな集落をつくって住んでいたことがわかる	
	● 巣伏の戦い（789）　アテルイ勝利 ● 坂上田村麻呂の勝利（801） ● 胆沢城できる（802） ・関東方面から4000人移住 ・胆沢郡ができる（８０４） ● 安倍氏台頭・没落（1062） ・瀬原の柵？ ● 奥州平泉誕生・滅亡（1189）	巣伏村（範囲内）　エミシの村→消滅 ・胆沢郡に７郷できる 常石郷（登岐波（ときわ）と呼ぶ） ↓　（現在の水沢、瀬台野、跡呂井、四丑、那須川の範囲） 柳廼荘（やなぎのしょう） 西部→塩釜村 東部→瀬台野村 （1187）	● 和名抄 ● 日本地理志料 ● 胆沢風土聞誌
中世	● 鎌倉時代 ・葛西氏の所領となる ・上胆沢郡は柏山氏の所領（瀬台野村含） ・瀬台野河港開かれる	約680年間 （胆沢郡３７ヶ村） ・土地がやせている ・水の便が悪い （開発が遅れた） →通称「四ヶ村」と呼ぶ ・瀬台野、跡呂井、四丑、那須川（村が小さいため、肝入はまとめて１人）	● 胆沢家景 ↓ 留守職に （民生担当）
近世	● 江戸時代 ・伊達氏の所領となる ・上胆沢郡を中心に伊達（本姓留守氏）駿河村儀領有する２９ヶ村（16,135石）の内胆沢郡は18ヶ村、他は宮城に加える	常盤村　郡内２５ヶ村に	● 安永風土記
近代	● 明治時代 ・第一次村の統合（明治8年） ・第二次村の統合（明治22年） ● 昭和 ・第三次村の統合（昭和29年）	瀬台野 → 真城村へ 跡呂井、四丑、那須川 → 佐倉河村へ 水沢市へ	

瀬台野村字名図（江戸期）



昭和39年度水沢市住居表示整備
新旧対照案内図

広報水沢より

新旧町字名一覧表

番号	新町名	旧字名
1	西町	字西町の一部・字田小路の一部
2	天文台通り	字高屋敷の一部・字西町の一部・字西上野の一部
3	星ガ丘町	字北田の一部・字車田の一部・字西上野の一部
4	福吉町	字北田の一部・字車田の一部・字西上野の一部・字片子沢の一部・字川端の一部
5	西上野町	字西上野の一部・字片子沢の大部・字川端の一部
6	中上野町	字宮下の一部・字片子沢の一部・字中上野全部・字東上野の一部・真城字小山崎の一部
7	袋町	字袋町の大部・字南町の一部・字宮下の一部
8	南町	字南町の一部・字袋町の一部・字宮下の一部・真城字肥後起の一部
9	東上野町	字宮下の一部・字東上野の一部・真城字小山崎の一部
10	山崎町	字南町の一部・真城字肥後起の大部・真城字小山崎の大部・真城字中田の一部・真城字甲田の一部・真城字北塩加羅の一部・字東上野の一部
11	花園町一丁目	字三本木の一部・字寺脇の一部・佐倉河字前村の一部・真城字供養塔の一部
12	花園町二丁目	佐倉河字前村の大部
13	神明町一丁目	佐倉河字前村の一部・佐倉河字中陣場全部
14	神明町二丁目	佐倉河字二ッ塚全部
15	東大通り一丁目	字寺脇の一部・字道合の大部・字中町の一部・真城字中道合全部・真城字供養塔の一部
16	東大通り二丁目	字寺脇の一部・真城字供養塔の一部・真城字大槻の一部
17	東大通り三丁目	真城字供養塔の一部・真城字辻堂全部・真城字原全部・真城字大槻の一部・真城字原中の一部
18	太日通り一丁目	字道合の一部・字南町の一部・真城字中田の一部・真城字甲田の一部・真城字北塩加羅の一部
19	太日通り二丁目	真城字大槻の一部・真城字上陣場の全部・真城字湿畑全部・真城字中田の一部・字南町の一部
20	太日通り三丁目	真城字大槻の一部
21	東中通り一丁目	真城字原中の一部
22	東中通り二丁目	真城字時行神の大部・真城字原中の一部
23	中田町	字南町の一部・真城字大槻の一部・真城字中田の一部・真城字荒屋敷の一部・真城字甲田の一部・真城字北塩加羅の一部
24	台町	字南町の一部・真城字原中の一部・真城字道場の一部・真城字荒屋敷の一部・真城字甲田の一部・真城字荒又の一部・真城字小荒の一部・真城字町屋敷の一部
25	泉町	真城字原中の一部・真城字時行神の一部・真城字下陣場の一部・真城字道場の一部・真城字機織の一部・真城字下中田の大部・真城字小荒の一部・真城字町屋敷の一部・真城字町北浦の一部・真城字寺後の一部
26	朝日町	真城字時行神の一部・真城字下陣場の一部・真城字機織の一部・真城字下中田の一部・真城字寺後の一部・真城字大学の一部

瀬台野概要

安永風土記には（瀬台野村として）

○戸数―52 軒
○人口―241 人　内　男 143 人　女　98 人
○神社―熊野社
○寺―長泉寺
○修験―日光院
○附舟２→片子沢舘（片子沢）
○代数有之御百姓（五代以上）１人。１代相続　町屋敷兵太夫（慶長年間～初代瀬川豊後）
○古舘（沼ノ上）―横山弥右衛門（寛文 11 年改易）
○名水―大清水（杉ノ戸）

1. 昭和 39 年水沢市の住居表示整備前

○字名（水沢市真城字　　）

中道合・肥後起（ひごおき）・小山崎・中田・北塩加羅・甲田・供養脇・大槻・辻畑・原・上陣場・湿畑（しけはた）・荒屋敷・小荒・苅又・町屋敷・町北浦・寺後・大学・堤根・下中田・送場（おくりば）・下陣場・原中・時行神（はやり）・鶴巻

2. 常盤村時代（明治８年）

○上記の外

荒屋敷・一葉起（いっぱおこし）・曲畑（まがはた）・三本木・寺脇・道合・中町・窪・熊野堂・沼尻・明神堂・中島・下谷起・杉ノ堂・瀬ノ上・宝龍田・二ツ檀・中陣場・前村など

3. 明治 22 年４月町村合併

常盤村時代の上記の地域は佐倉河村、水沢町、真城村へそれぞれ移った。

※・歴史的に見ると、昔から人々が住んだ台地である。（縄文・弥生・奈良・平安時代の遺跡）
・戦場になった場所（地名、伝承）―安倍氏が陣をかまえ戦った場所。
・北上川の河港（下姉体村附舟 22 艘）として栄えた集落（瀬台野河港と町屋敷）
・塩釜村に近い場所は水利の便が悪く畑作中心で街となった昭和 30 年代からである。
・中世から近世まで上胆沢に属した。

「陣場」という地名

安永風土記には、安土呂井村旧蹟として「古戦場」とあります。アテルイの時代、前九年の役（1051 年～）の戦場と思われ、口碑伝説によれば、安倍氏の鵜ノ木に源氏の泉沢舘にて対峙、上、中、下陣場も激戦の地とあります。（現在朝日町）

「胆江の地名と風土」では、上、中、下陣場について、「八幡太郎義家は、初め、上陣場に陣を構えていましたが、賊の勢いが意外に強かったので、中陣場、下陣場と退き、ついには瀬原柵まで兵を引くことになりました。一説によると、義家軍が瀬台野の陣から退いて新たに陣を敷くことになったといわれ、新しい陣地は、瀬台野にちなんで、瀬原と名付けられました。」とあります。

「送場（おくりば）」という地名

水沢市史３近世（上）に、寛永 15 年（1638）８月 15 日、水沢留守初代伊達宗利逝去、大安寺三世、増長寺一世和尚導師により火葬する。とあり、その場所が送場（現在台町）と言われています。また、その場所に樹木を植えたと記されており、それが供養塚ではないかと言われていますが、昭和時代の供養塚は、国道と小山崎への農道三叉路にあったので、町屋敷か小荒地内と思われます。

供養碑は、国道改良後に熊野神社境内に移転されたとありますが定かではありません。

熊野神社

熊野神社及び観音堂の勧請、現在地への遷座については不明ですが、安永風土記によると、観音堂の別当は羽黒派日光院とあり、地主は町屋敷とあります。

また、観音堂境内と地主御境一円と記され、先祖はお百姓で、慶長年間（1596 ～ 1615 年）より当村に居住と申し伝えられています。

観音堂は、瀬川貞清家の屋敷にあり、昭和年代には、清水様、はやり神様、道場とも呼んでおり、地主を「法眼様」とも言ったそうです。

日光院道場の本尊は、不動明王といわれ、瀬川家の墓石に権大僧都日光院宝清と刻まれています。

昔、真城字熊野堂地内に熊野神社がありました。この境内には、いつどこからともなくホイト（乞食）が一人、二人と住むようになり、 やがては三つのグループの根城と化し、そのうちにこの仲間同士で結婚するものも出て、そのお祝いの席には別当さんまで招待されるようになり、別当さんは、自家製の藁づとに入った納豆をご祝儀として持参したそうです。

熊野神社は、かくしてホイト群に占領された格好になり、参拝者もめっきり少なくなりました。心配した別当さんたちは協議を重ねた末、この神社をよそへ移転することになり、当時の瀬台野分教場（現瀬台野分館）のそばにお移ししたということです。現在の熊野堂地内は、杉木立の中の古びたお堂が当時の面影を止めています。

―水沢風土記第４巻　みずさわの年中行事・伝説より－

瀬台野分教場

大正２年（1913）４月
　真城（折居）、中野、秋成、瀬台野の４校を合併して現在地に真城尋常小学校を設置し、真城（折居）、中野、瀬台野の各校は分校となる。
昭和 30 年（1955）
　真城小学校瀬台野分校廃校。
　明治時代より昭和 30 年まで続いてきた分校は、現在の常盤小学校と同時に統合される。
同年６月
　旧分校舎を利用して幼稚園開園に協力。
　昭和 35 年 12 月 31 日迄続き、翌年に現在地（東大通り）に移転した。
昭和 31 年（1956）
　旧分校舎を利用して瀬台野分館の誕生（幼稚園と併設）と考えられます。

水沢市立常盤公民館
瀬台野分館沿革史より

瀬台野神楽

瀬台野神楽は、近隣より高く評価されています。

瀬台野村に住む、山伏日光院清延が年代は不明ですが、出羽羽黒山寂光寺法師の玄陽院より免許を授かったと言われています。ちなみに、師玄陽院は寛文６年（1666）８月に逝去しています。

明治年間に、この地方に悪疫が流行っていた時に、神楽面を被って病魔払いの行列をつくり巡回したと言われています。

また、室町時代末期を含め、江戸時代初期・中期・後期に作られた瀬台野神楽面と思われるものが 30 個近くも保存されていました。しかし、由緒ある瀬台野神楽も、大正９年（1920）に庭元の自宅が火災に見舞われ、殆どの記録が焼失してしまい詳細は不明となってしまい、神楽は中断され仮寂の状態が続きました。

その神楽も、流れをくむ江刺区田原の川内神楽保存会の指導を仰ぎ、当時の青年会有志の人たちにより現在の瀬台野神楽が発足され、昭和 53 年（1978）11 月３日、晴れて待望の舞台披露と「神代神楽」伝授の儀が行われました。

舘の大清水（おおすず）

この湧き水は、明治初期に土地所有者の折笠徳松氏が窪みから掘り当てたのが最初だと言われています。

以来、この地区の人々は、この湧き水を神の恵みの泉と言い、飲み水、風呂水としてはもとより、野菜の洗い場、洗濯の場として大切に使ってきました。

昭和 22 年、23 年のカスリン・アイオン台風や、その２年後の大雨で埋没直前の被害を受けましたが、地区の人たちが協力して補修を行い、現在も大切に利用しています。

「舘の大清水看板」より

瀬台野河港

「水沢市史」３近世上 280 頁では､「河港の開設は元和､寛永（1615 ～ 1643）年間ではなかろうか」と記し、818 頁には「正保２年（1645）瀬台野御蔵設ける。」とあります。

翌３年大洪水により河道東遷したが、かえって水流が穏やかな良港となり、享保３年（1718）御蔵が跡呂井に移るまでの 73 年間河港の役割を果たしたと記されている。その頃の町屋敷は大変な賑わいで瀬台野小路と呼ばれたようだ。

「安永風土記」には旧跡原ノ町とあり「横山弥次右エ門様当時御住居砌御家中町之由申伝候当時御百姓居屋敷并畑二罷成居丁数相知不申候事」と説明されている。そして小名に原ノ町、屋敷名に町屋敷四拾四軒となっており、瀬台野村の家数五拾弐軒と記されている。この町屋敷の西に小荒というところがあり、現在の酒屋さんの附近に供養塚があったが、国道３４３号線改良工事のため姿が消え、多くの石碑は熊野神社境内に遷された。

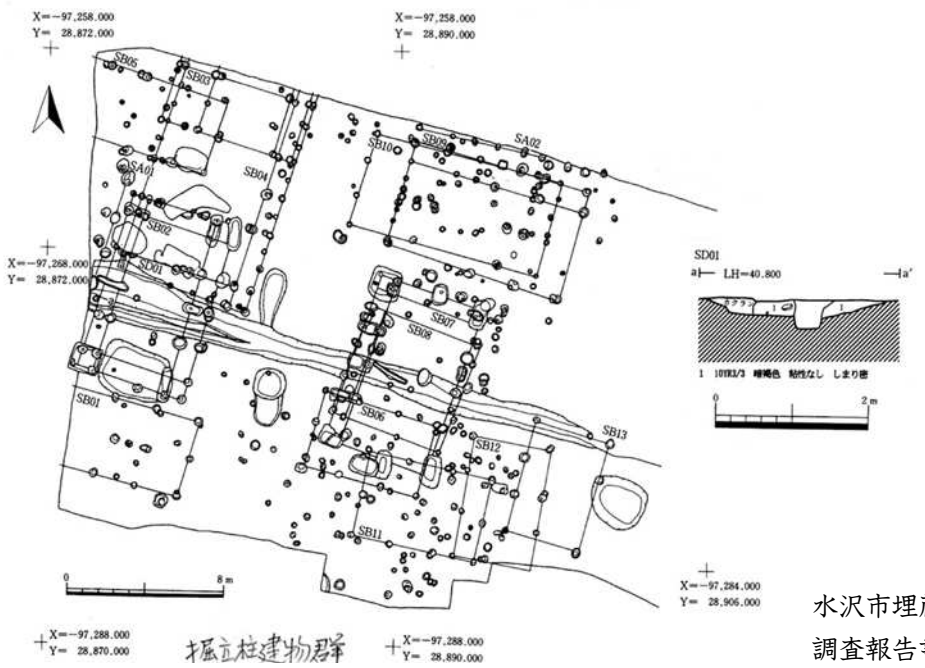
―水沢風土記第４巻　みずさわの年中行事・伝説より－

町屋敷遺跡

遺跡の北側を自然谷、東側が段丘崖、西と南は人工的な堀によって周囲の地形から区画されている。南側は現在排水路として使用されているが、中央部は埋没しており、わずかにくぼみがわかる程度である。中央から北側にかけては徐々に深さがましている。水沢市史によると、遺跡周辺に葛西氏の家臣が居住していたと記載されていることから、おそらく中世の堀が掘られたものと推測する。

江戸時代には北上川に面した河港、瀬台野河港があり、そのすぐ北側に瀬台野御蔵場である町屋敷遺跡がある。御蔵場とは買米を収納する仙台藩直属の施設で、安永年間（1772 ～ 1781 年）には 92 カ所が藩内におかれていた。

今回の調査で掘立柱建物跡が 27 棟ほど見つかっており、間仕切りが見られないなどの柱穴配列から蔵跡である可能性が高いが、残念ながら詳細を知り得るような資料はない。瀬台野御蔵は正保２年（1645）に設けられてから享保３年（1718）に北上川の東遷により跡呂井に移されるまで 70 年にわたって御蔵を備えた河港として機能していた。その後も舟着場として文書に残っていることから、しばらく利用されていたであろう。



水沢市埋蔵文化財調査センター
調査報告書　第 15 集より

瀬台野古館
（浪文館）

この林の向こうが瀬台野古館跡

瀬台野は水沢駅の南２ｋｍの地点にあり、館跡は、水沢競馬場の西南 300 ｍの低い台地上に見られます。現在は、一帯が杉林となっていますが、一部開発されて宅地や畑地となっています。

館跡は、競馬場の西側の段丘上にあり、東西 50 ｍ南北 80 ｍの平場がそれで、東西にわずかな壇、西面の街道沿いに若干の土塁のあとが見られるにとどまる他は、単なる屋敷あとの感じで、中世の遺構らしきものはあまり見られません。

西隣りの台地で現在水田になっているところの一角が「内室」の屋敷あとで、北面には「大学」と呼ばれる家来の居住地、南面には「御蔵場」の建物があったと言われています。

この館は一応平城形式ではありますが、南北両側を山沢（堀）で囲まれ、しかも北上河岸段丘上に位置し、北上川側（東側）から見るとまとまりがよい。

「安永風土記」には、沼の上「古館」と書かれていますが、規模や構造について一切書かれておらず、瀬台野古館がいつ、誰がどのような目的でつくられたのかも記録がありません。

記録として残されているものを拾い上げてみると、この館は（浪分館）北上川河港集落の中心として、中世からあっとものと思われ、北上川を管理する上で重要な館であり、水沢市史３近世（上）によると、慶長の頃（1596 ～ 1615）、南部から北上川を下って住み着いたという肝入瀬川氏をはじめ諸氏が住み、河港集落が拡張され、人口が多くなりますます水沢河港集落としての重要性を増し「町屋敷」と呼ばれるように発展したものと思われます。

留守家時代の古館は、横山弥次 (治) 右衛門の御住館と言われ、古館には周囲一丈もある大桜があって、名伝桜と呼ばれたようです。

横山弥次右衛門については、出自、経歴などあまりよく知られていません。水沢市史に最初に登場するのは、慶長 19 年（1614）の大阪冬の陣に出陣した伊達鉄砲隊の一員として、後藤寿庵と共に出陣し、そして翌年の大阪夏の陣に後藤寿庵、馬場蔵人と共に、鉄砲百挺で参陣とあり、この時すでに一部将格であったことがわかります。

次ぎに、横山弥次右衛門が歴史に登場するのは、伊達家騒動にからんでのことで、騒動は、万治３年（1660）三代藩主綱宗が若くして隠居を命ぜられ幼少の綱村（３歳）に嗣がせ、後見政治を始めたことから端を発しています。その後政争が激しくなり、騒動の中心人物の家老原田甲斐が江戸伊達藩邸で斬死したのは、寛文 11 年（1671）の３月でありました。

原田甲斐の腹心とされる横山弥次右衛門が四国宇和島に流されたのは、同年４月とすると風土記にあり、22 年後の元禄６年（1693）６月に放免されて仙台の親戚に引きとられています。

横山弥次右衛門は、政治的能力に優れ、更に武道に優れているため、一家・譜代でないにもかかわらず出世し加増されていったものと思われます。ただ、原田甲斐の政治の中心部に入り込みすぎた結果、いろいろと怨みを買い、大悪人とされてしまったとみるべきでしょう。

一家の家格である一関の伊達宗勝も原田派であったり、瀬台野に在郷屋敷（瀬台野古館）のあった横山弥次右衛門の関係から、水沢藩も相当の影響を受け、藩内も混乱した。（水沢市史）

横山弥次右衛門については、約 80 年にわたって歴史に登場します。はじめて歴史に登場した大阪冬の陣参陣の時 30 歳前後としても、百年以上も存在することになりますが、後に代々弥次右衛門を名乗ったためと思われます。

「真城の記録誌」より

御蔵場

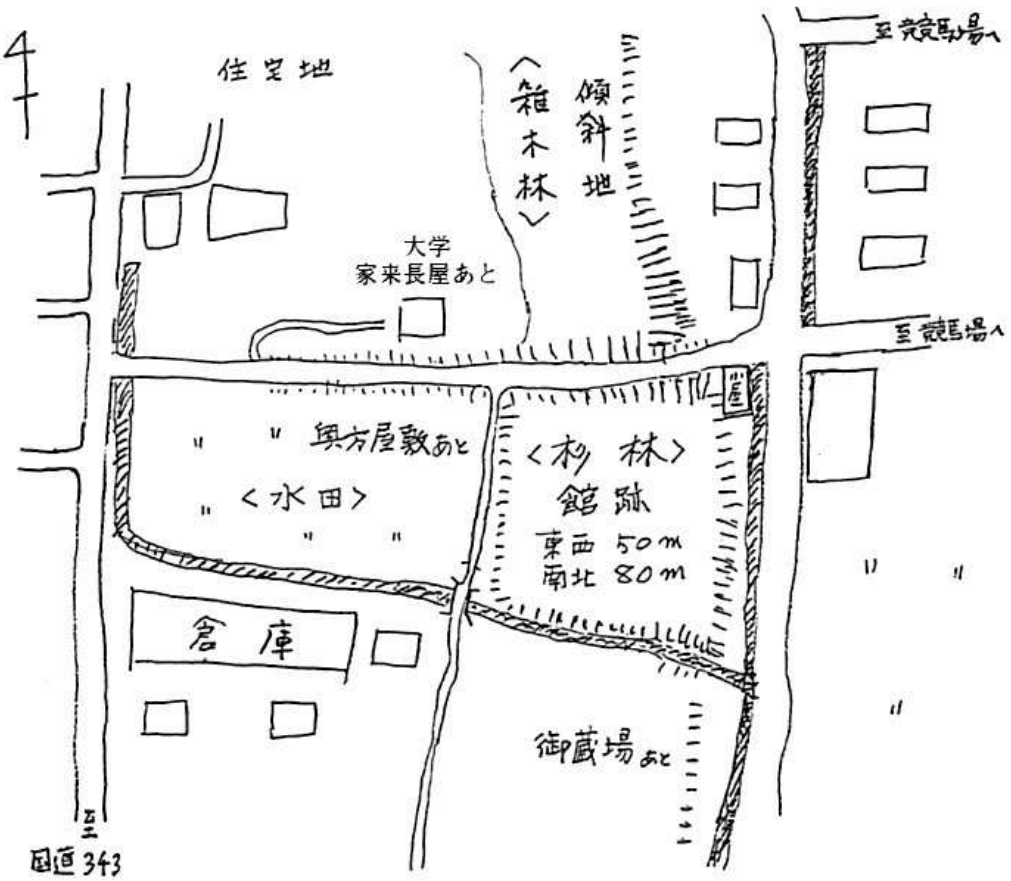
文献によると、町屋敷に正保２年（1645）頃、御蔵場と呼ばれる倉庫群が設置され、北上川の流れの変化によって船場として不適当となり、享保３年（1718）に御蔵業務を跡呂井に移したことが記されています。

この地での御蔵場は 74 年間使われたことになり、平成になって発掘調査を完了しています。

大　学

安永風土記に、大学屋敷１軒とあるのは、以前は学問所ではないかと思われていましたが、現在では、横山弥次右衛門の勘定役をしていた遠藤大学という人が住んでいた所が大学という地名になったとも言われています。

〈瀬台野古館位置図〉



「真城の記録誌」より

杉之堂（おおすず）の大清水

水沢のふるさと名所 50 景にも指定されています

「安永風土記」にも記されているこの清水は、弘法大師が立ち寄ったと言い伝えられています。

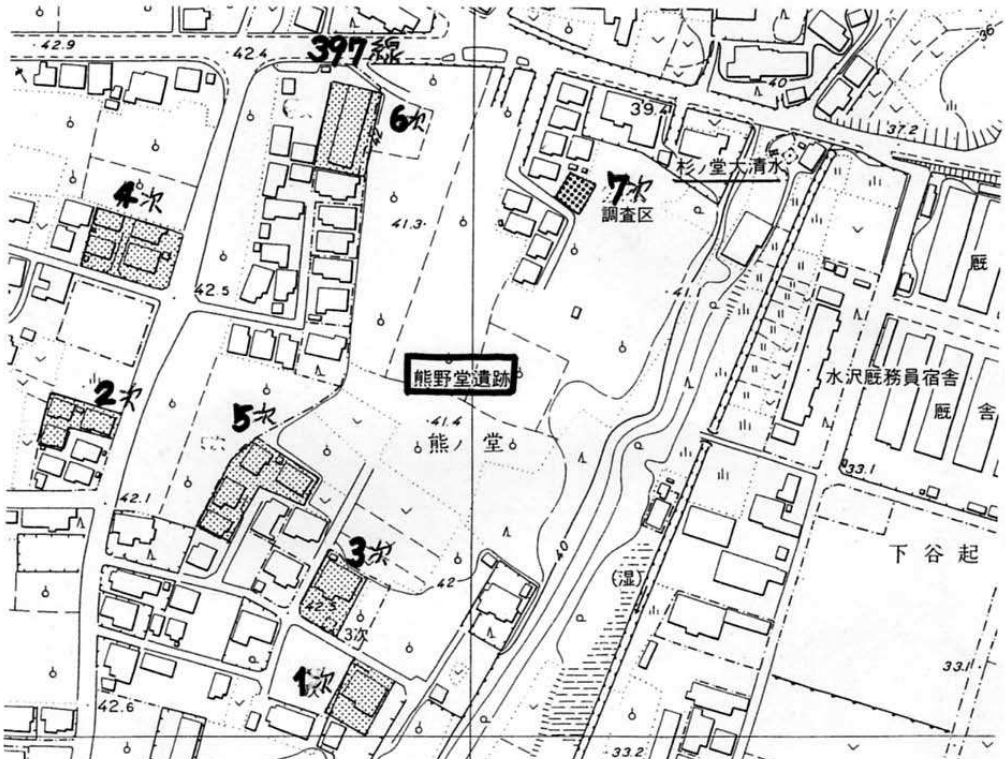
周辺からは、縄文晩期の土偶を始め、遺跡、遺物が発掘されており、古来より水を求めて人が住みついていたことを示しています。

また、「弘法の湯」として、周辺に自生する片葉の葦を使い、薬湯泉として利用され、大正初期まで繁盛したと言われています。

この水は銘醸会社の仕込み水にも使用されたことがあり、一時期現地では寒天造りが行われていたこともあるそうです。ちなみにこの清水は、昭和60年(1985)に「岩手の名水 20 選」に認定されています。

熊野堂遺跡

熊野堂遺跡は、JR 水沢駅の東の 1.7km の水沢段丘上位面の東縁辺部に立地する。遺跡の東側は北上川の浸食崖により画されている。この段丘縁辺部には東西方向に小支谷が入り込み、標高 41 ～ 42m の平坦面を画している。



遺跡北縁にある国道 397 号線の北側には、縄文時代晩期から弥生時代初頭、奈良時代後半から平安時代の集落跡である杉之堂遺跡が位置する。本遺跡の南側には小支谷を挟んで奈良～平安時代・中世の散布地である沼尻遺跡、大学遺跡がある。遺跡の現状は畑地である。

本遺跡は昭和 59・63 年、平成元・3・6 年度に 6 次に亙る調査が行われており、縄文時代中・晩期、弥生時代中期の散布地、奈良時代後半から平安時代前半の集落地であることが明らかになりつつある。

水沢市埋蔵文化財調査センター
調査報告書　第 37 集より

岩手日日新聞　2010年（平成22年）7月28日

ふるさと真城一巡り

奥州・水沢　最終、わき水など探訪

奥州市水沢区の真城ふるさと探訪教室（真城地区センター主催）は25日、地区内の瀬台野地区で開かれた。参加者が地域を特徴付けるわき水や遺跡などを巡り、地域の歴史に触れる散策を楽しんだ。

「昔のおもかげ探す瀬台野散策」のテーマで区内外からスタッフを含め26人が参加。瀬台野分館を発着点として「館の大清水」、瀬台野古館、「北上夜曲の碑」、「杉之堂の大清水」などを巡った。

このうち、北上夜曲発祥の地の石碑が建つ小谷木橋たもとの北上川河川敷では、参加者全員で「匂いやさしい白百合の～♪」と口ずさみ、石碑に刻まれた名曲の誕生秘話に会話を弾ませた。

出発時に小降りだった雨が途中で強くなったり、その後は晴れ上がって暑くなったりしたが、参加者は各立ち寄り先でボランティア講師3人が分担した解説に熱心に耳を傾けた。

同教室は、真城地区の歴史や文化、名所などを学び、次世代に伝承する目的で毎年続けてきたが、地区内の主な場所を一巡したため今回が最終となった。

金ケ崎町の70代女性は「古里を知りたいとの思いで参加してきた。知らないで育った地域を見直せるとてもいい行事。別の形でも続けてもらえれば」と話した。

「杉之堂の大清水」で講師の解説に耳を傾ける真城ふるさと探訪教室の参加者